様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２２１９

研究課題名（和文）禅律文化圏と説話伝承文学との交渉についての研究

研究課題名（英文）Connection between the Cultural Spheres of Ritsu and Zen in Narrative and Folk Literature

研究代表者
小林　直樹（Kobayashi, Naoki）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：４０２３４８３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：鎌倉期には仏教の基本的な修行項目である三学（戒・定・慧）を兼備することを願い、諸宗兼学への強い志をもった遁世僧が輩出する。本研究では、彼らの中でも説話集作者として名高い、慶政（1189-1268）と無住（1226-1312）の著作を主たる対象として、そこに律や禅といった宋代仏教の影響を具体的に指摘するとともに、その成立背景についても明らかにした。さらに、そうした志向性をもった遁世僧の文化圏で生成する特有の説話世界についても考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
遁世僧の間で中国・南宋との文化交流が活発に行われた鎌倉時代、自ら南宋に留学したり、入宋僧ゆかりの寺院で修学したりすることにより、宋代の最新の仏教典籍に触れ得た遁世僧たちがいかに大きな知的刺激を受け、自らの著作活動に結実させていったか、鎌倉期遁世僧の文芸の営みを日宋交流史の中に位置づけて捉えようとした点に本研究の学術的・社会的意義は存する。

研究成果の概要（英文）：The Kamakura period saw the emergence of a great number of tonsei-so (reclusive monks) who had a strong interest in various sects and teachings and wished to combine the san-gaku or the three divisions (kai [precepts], jo [meditation], and kei [wisdom]) of the noble eightfold path, which is the basis of Buddhist practice. In this study, from among these monks, we consider the works of Keisei (1189-1268) and Muju (1226-1312), who are renowned writers of setsuwashu (narrative collections); we highlight the influence of Buddhism of the Song period, including ritsu (principles) and zen (meditation) and present a clarification of the background of its establishment. We also investigate the distinctive narrative world created in the cultural sphere of the reclusive monks who had such an orientation.

研究分野：日本中世文学

キーワード：無住　沙石集　雑談集　四分律行事鈔　宗鏡録　南宋　慶政　閑居友

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、国文学のみならず、歴史学や思想史の方面からも注目を集めている遁世僧に禅律僧と呼ばれる人々がいる。禅律僧とは、仏教の基本的修行項目である戒・定・慧（教・禅・律とも）のいわゆる三学のうち、慧（教学）のみを重視して戒・定という実践面を軽視しがちな顕密仏教界を離脱し、三学兼備・諸宗兼学への強い志向性をもった遁世僧をいう。寺院社会の世俗化による戒律の衰退への反省と、三学兼備を特徴とする宋代仏教の影響とから、とりわけ鎌倉期以降、禅律僧は多数輩出し、その文化圏は中世説話伝承文学の世界とも深い繋がりをもっている。

本研究では、説話集撰者としても知られる、鎌倉前期の慶政、鎌倉後期の無住という二人の遁世僧とその周辺を主要な分析対象に据え、その著作を中心に禅律文化の影響を具体的に剔出するとともに、あわせて禅律文化圏において生成される特有の説話世界についても明らかにしたいと企図したものである。

２．研究の目的

(1) 園城寺出身の遁世僧・慶政の律僧的側面については、外部徴証により次第に明らかにされつつあるが、実際に慶政の著作にどの程度、律学的特徴が反映しているかという点の解明はほとんど進んでいないのが現状である。本研究では、慶政の著作の分析から、彼の学問基盤に占める律学的側面の具体相を明らかにする。

(2)鎌倉後期の遁世僧･無住が修学の初期に律を学び､修学の最終段階では禅を学んだことは、無住自身が『雑談集』に記しているところであるが、彼の著作に具体的に律や禅の修学の影響がどのようなかたちで結実しているか、必ずしも明らかにされているとはいいがたい。本研究では､無住の著作に律と禅の修学が投影している状況を説話的記事への着眼から明らかにする。

(3) 無住も修学の初期の段階で身を投じたと考えられる西大寺流律僧の説話世界についても、叡尊の著述をもとにその一端を明らかにする。

３．研究の方法

(1) 慶政の学問的背景も含めて律僧としての側面を明らかにするためには『閑居友』がもっとも有効な分析対象である。従来､『閑居友』の注釈研究において律典との具体的な関わりはほとんど指摘されてこなかったが、道宣撰『四分律刪繁補闕行事鈔』を中心に律典との影響関係を全面的に調査する。

(2)無住の著作における律学の影響を考えるためには道宣撰『四分律刪繁補闕行事鈔』に加え、元照述『四分律行事鈔資持記』を逸することはできない。無住の著作中、とりわけ『沙石集』と『雑談集』における両書の投影箇所を説話的記述を中心に精査する。

(3) 無住の禅の修学において中心を占めるのは、師の円爾を通して知り得た延寿の主著『宗鏡録』の存在である。大部の著作であるため、まずは『沙石集』と『雑談集』を中心に『宗鏡録』の投影箇所を調査する。

(4) 西大寺流律僧の説話世界について明らかにするため、叡尊の説教聞書『興正菩薩御教誡聴聞集』や、その著『梵網経古迹記輔行文集』、さらには西大寺流律僧の文化圏で成立したとおぼしい『八幡愚童訓（甲本)』の説話的記事を調査する。

４．研究成果

(1) 鎌倉前期の遁世僧・慶政については、近年、律との深い関係が明らかにされつつあるが、その著作である『閑居友』に律の影響がどれほど及んでいるのかという検討はこれまでまったくなされてこなかった。そこで､『閑居友』の二大テーマともいえる節食と不浄観の説話を対象に、律の投影の具体相を探ろうと試みた。

節食説話の代表的な存在は上巻第 13 話であるが､当該話につづけて展開される慶政の長文に亘る食事論には、実は『四分律刪繁補闕行事鈔』の投影が顕著である。従来､『大智度論』に拠ると考えられてきた箇所はすべて『行事鈔』に出典が塗り替えられ、食事論全体が『行事鈔』の教説に立脚して行論されていることを明らかにした。

一方、不浄観説話では上巻第 19 話が注目される。ここでも説話末の慶政の評語には、従来からよく知られている『摩訶止観』と並んで『行事鈔』の投影が濃厚に認められる。それは､『摩訶止観』に説かれる大不浄観の教えと『行事鈔』に説かれる食の観法の教えとに重なる点が多分に存在するためと考えられる。天台宗寺門派出身の慶政は、幼少の頃から『摩訶止観』を学び、不浄観に深い関心を持っていたと推測されるが、こうした天台教学の実践的な側面が、後に『行事鈔』の教説を受け入れる際の恰好の受け皿の役割を果たしたものと思われる。

このように『閑居友』においては､『行事鈔』の教説が『摩訶止観』のそれと並んで重要なものと考えられるが、そのことは本作品の巻頭を飾る真如親王説話からもうかがえる。当話には先行伝承には認められない独自部分が存しており、そこには『行事鈔』の説く食の観法の点か

らも、『摩訶止観』が説く不浄観の観点からも関心を惹起する要素が含まれているからである。そして、『行事鈔』の教説と慶政との出会いには、南山律の復興期になされた彼の入宋経験が少なからず関わっているものと推察されるのである。
　本研究は、慶政における律学の実相を作品内部から剔出して明らかにした点に重要な意義を有し、慶政を取り巻く環境的視点からの研究と補完することによって、慶政研究を前進させることに寄与するところが大きい。
　→〔雑誌論文〕①

（2）鎌倉後期の遁世僧・無住の最初の著作『沙石集』における律学の影響を説話的記事について調査した。その結果、律の基本文献である道宣撰『四分律刪繁補闕行事鈔』とその注釈書、元照述『四分律行事鈔資持記』の説話的記事の痕跡が 7 話（米沢本、他に流布本系に 1 話）に認められた。それらはすべて天竺説話であり、もともと「近代ノ事」を書き置こうとした『沙石集』にあっては天竺説話は少数派であることを考慮すれば、その数は決して少ないとは言えない。
　無住が律を集中的に学んだのは 28 歳の時から 6〜7 年間であった。『沙石集』は長命を保った無住としてはもっとも若い時期の作品であり、それ故、本作に無住の律修学時代の投影が色濃いのも納得されるところである。
　本研究は、『沙石集』における説話レベルでの律の影響を初めて本格的に明らかにした点に意義を有する。
　→〔雑誌論文〕②

（3）無住の最晩年の著作『雑談集』についても律学の影響を説話的記事について調査した。ここでも『四分律刪繁補闕行事鈔』と『四分律行事鈔資持記』の投影は 9 話において認められ、先に（2）で触れた『沙石集』への投影分とあわせると、両律疏から無住の著作に都合 17 話の説話的記事の摂取が認められたことになる。しかも、採用説話の両律疏における分布状況は、上巻から下巻に至るまで、ほぼ全編にわたっており、『資持記』によって『行事鈔』を読み解いたであろう無住の熱心な修学の様子が彷彿される。さらに、採録された両律疏の説話的記事の扱いに注目すると、無住が『沙石集』や『雑談集』を執筆する際、座右に置いていたのは両律疏そのものではなく、それらから説話的記事を中心に抄出した抜書資料のごときものであったことが明らかとなった。
　本研究は、（2）とあわせ、『沙石集』や『雑談集』という説話を主体とする著作において、無住の律学が基盤の部分でいかに活用されているか、明らかにした点に意義がある。
　→〔雑誌論文〕③

（4）無住は修学の当初より戒・定・慧のいわゆる三学への志向を強く持していたが、その三学兼備への志向性が、やがて東福寺における円爾膝下での修学を機に、三学具備の書、延寿『宗鏡録』との出会いをもたらし、無住に絶大な影響を及ぼした可能性について考察した。
　まず、序文の中で『沙石集』の書名の由来を説く「彼ノ金ヲ求ル者ノハ、沙ヲステヽコレヲトリ、玉ヲ瑩ク類ハ石ヲ破リテ是ヲ拾フ」は『宗鏡録』の「石より玉を弁るがごとく、沙を披きて金を揀ぶに似たり」に依拠するものである。さらに、『宗鏡録』では、この文言の前後で延寿が著作の真意を読者に汲み取ってほしいと要望するくだりがあるが、『沙石集』の序文において無住も同様の読者への呼びかけを行っており、ここにも両者の影響関係を認めうる。そして何より重要なことは、序文の中でも作品の主張を端的に伝える「夫、道ニ入方便、一ニ非ズ、悟ヲ開ク因縁、是多シ。其ノ大ナル意ヲシレバ、諸教ノ義コトナラズ。万行ヲ修スル旨、皆同ジキ者哉」が、ほとんど『宗鏡録』の主張といってもよいほど類似する点である。すなわち、無住にとって『宗鏡録』という書との出会いが『沙石集』執筆への強い動機付けとなったと考えられるのである。
　ただし、無住は『宗鏡録』から大きな影響を受けながらも、その目指す方向は異にしていた。最上根の読者を対象とした『宗鏡録』に対し、『沙石集』は「愚ナル人」を対象とし、経論の抄出集成を目指した『宗鏡録』に対し、『沙石集』は説話に比重を置いた。無住は『宗鏡録』との出会いによって、かえって著述の道で自ら歩を進めるべき方向性を見出し、50 代にして初の著作である『沙石集』の執筆に取り組むことになったと考えられるのである。
　本研究は、無住の『沙石集』執筆の直接の動機、ならびに書名が禅籍である『宗鏡録』に由来するものであることを初めて解明した点に大きな意義を有するものである。
　→〔雑誌論文〕④、〔学会発表〕①

（5）上記（4）の研究で、無住の著作の中でもとりわけ『沙石集』にとって『宗鏡録』が思想や発想の非常に深いところに影響を与えている重要な書物であることを明らかにした。それを承け、本研究では『沙石集』の『宗鏡録』投影箇所について、両書の前後の文脈を十分に読み込みながら、その受容の相を検討した。
　まず、夫を後妻に、妻を間男に取られても嫉妬の心を起こさぬ稀代な人々の挿話を語る「嫉妬ノ心無キ人ノ事」（米沢本巻 9）では、『宗鏡録』に由来する短い中国の諺が引用される。実は、この『宗鏡録』の前後の文脈では、人間の「情執」をめぐる「自性清浄心」とそれを曇ら

す「阿頼耶識」の関係が説かれており、無住はその文脈を強く意識して『沙石集』の説話構成を行っていると見通される。一見､尾籠で間の抜けた味わいを有する説話の登場人物の背後に、無住は「自性清浄心」を見ているのである。と同時に、無住がそうした視点を『宗鏡録』から得たことにより、嫉妬の心をもたないという、説話文学史上極めて稀なテーマによる説話構成が可能になったともいえるのである。

さらに、「諸宗ノ旨ヲ自得シタル事」（米沢本巻 10 末）では、『沙石集』中でも最も枢要な山中の老僧の物語が語られるが、その後に、『宗鏡録』を出典とする演若達多説話が引用される。老僧の物語は『宗鏡録』の助けを借りることで、作品中における着地点を見出せたともいえるのである。そして、老僧の物語の主題と『宗鏡録』の主張の親和性を考慮すれば、両者の出会いは半ば必然であったと考えられるのである。

本研究は、無住の発想や思想を『宗鏡録』が深いところで規定している側面があったことを実証的に明らかにした点に重要な意義を有している。

→〔雑誌論文〕⑤

（6）無住が若き日に信仰に身を投じた西大寺流律僧の説話世界についても考察を行った。

叡尊の説教聞書『興正菩薩御教誡聴聞集』に見られる比喩や、基本的律書『梵網経古迹記』の叡尊による注釈書『梵網経古迹記輔行文集』に認められる因縁記事、さらには西大寺流律僧の文化圏で成立したとおぼしい『八幡愚童訓（甲本）』の説話的記事などを調査し、孝順と慈悲が西大寺流律僧の説話世界の基調を成している可能性を指摘した。

本研究は、いまだ十分に解明されているとはいいがたい西大寺流律僧の説話世界の一端について明らかにしたという点に意義を有する。

→〔図書〕①

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 小林直樹､「『閑居友』における律―節食説話と不浄観説話を結ぶ―」､『国語国文』､査読有､84 巻 10 号、2015、pp.1-18

② 小林直樹､「無住と律（一）―『沙石集』と『四分律行事鈔』・『資持記』の説話―」､『文学史研究』､査読無、56 号、2016、pp.127-139
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_111E0000001-56-10

③ 小林直樹､「無住と律（二）―『雑談集』と『四分律行事鈔』・『資持記』の説話―」､『文学史研究』､査読無、57 号、2017、pp.53-67
http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_111E0000001-57-4

④ 小林直樹､「無住と三学―律学から『宗鏡録』に及ぶ―」､『説話文学研究』､査読有、52 号、2017、pp.121-129

⑤ 小林直樹､「『沙石集』と『宗鏡録』」､『日本文学研究ジャーナル』､査読無、10 号、2019、pp.69-82

〔学会発表〕（計 1 件）

① 小林直樹､「無住の律学と説話」､説話文学会 2016 年度 9 月例会シンポジウム「無住―その信仰の軌跡」､2016 年 9 月 24 日、名古屋市立大学（愛知県名古屋市）

〔図書〕（計 1 件）

① 小林直樹 他、和泉書院､『説経―人は神仏に何を託そうとするのか』､2017、pp.13-34（「説教から説経へ―西大寺流律僧の説話世界を軸に―」）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。